ねじばな雑記

冨田惣七

何時も同じような事ばかり書いているなあ、と自分でもそう思うのですが、私にとっては、やはり自然科学、いや科学というものは、問題を解明してそれに解答をあたえるための学問ではなく、答の出せない不可思議なことがらを一生懸命さがし出すための学問であるように思われるのです。

"人間は誰でも自分たちが生きている世界をよりよく知りたい欲求を持つ。そしてくわしく調べる"と素粒子「序」の中で湯川秀樹先生は言われる。ところがその先生はどうかというと、毎日必ず心の問題に向いあう時間を持つために、詩集をひもとくのを日課とされている、という事です。

とすると先生は科学に何を求めていられるのであろうか。私のような馬鹿な男に分かるはずはないだろうが、上記のことばや、先生の日課のことなどを考え併せてみると、私には、人間をめぐるこの世界の不可思議さ、それをもつと知りたいものだという願いではなかろうかと思われるのです。

手段としては、論理や、解明や、証明があるけれども、それは目的ではない。

目的は、この自己の存在と、その生命と、それをとりかこんでいる無限の不思議さ、その関係、その絶妙な因果、それを知りたい。結局は、人間は、はかない命しかもっていないのだけれども、その命と、こゝにある一本の草花とは、どんな関係で、共にこの世に同時に命を得ているのであろうか。

言ってみれば、というようなところに先生の科学に対する期待の根源があるのではないだろうか。などと自分勝手な解釈の楽しみをしているわけです。

去年のことです。ふとしたことで"ねじばな"をもらいました。あるところでずいぶん久しぶりにそれを見てから、何とか手に入れたいと思っていた時でありました。

丁度足羽山を歩き廻っていたときだったので、その時"きつこうはぐま"を見つけたのを持って帰って、小鉢に入れ、"ねじばな"とならべて机のすみに置いていました。

私はこの二つの植物を見くらべながら、またしても、不思議でならないこの世界のしくみの深さにひきこまれてしまいました。

"ねじばな"の花は整然と螺旋階段のように、上の方にぐるぐる廻転しながらのぼっています。そこには完全な計算と測定があります。

しかし"きつこうはぐま"の方は、全くのでたらめで、幾つもがくつついているかと思うと、間の抜けたところに一つぽつんとあったりして、この方は勝手気まゝでぜんぜんルールがありません。

このような違いはどんなことから起ってきたのだろうか。どんな条件があったために、どんな出来事があったために、こんな違いを作り出し、それを子々孫々にまで伝える事になったのでありましようか。

特にそのものが経なければならなかった出生と今日に至るまでの歴史が、この一つの小さい山に

生えている隣同士の二つの植物の違いを作り出したとすれば、その別れ目の理由は何であったのだろうか。

片方が整然としており、片方が全く度はずれた独創的な個性によっているかに見えるこの形態上のちがい方は、どういうわけあいによっているのでしょうか。

ともあれ、この二つの植物の花のつき方がわたくしに示しているものは、人間の頭ではとうてい考えることの出来ない理由のように見えます。

一つの形態を持つに至った歴史的進化の跡をたどる事は、科学の仕事であるし、科学はそれを果すでありましょう。

しかし、この途方もない違い方の科学的は対面にどのような返答が用意されるのでありましょうか。そして又、例えて言えば『ねじばな』の左に巻いたり、右に巻いたりしはければならない理由を説明することは困難なのではありますまいか。

私は考えます。学問が、自然の中に立ち入る事のできる限界は、どれ程のものでありましょうか。限界の無限の拡大という宿命は、つまりは何時までたっても不可思議さの向うにたどりつけない、という事ではないでしょうか。

自然のこの不可思義さは、何か桁はずれに深く遠いものとしてだけ、わたくしたちは、何時までも考えていくのでありましょうか。